心の冒険教育実践事例研究会資料

小学校教諭　　岡女史（なあ）

★　事例　人権教育（道徳）「くりのみ」　　【対象：小学１年生３８人】

１月に行われた１日参観日の中で人権教育に関する授業を行うことになり、同学年で道徳の副読本の中にある「くりのみ」という題材で授業をすることになった。しかし、ただそのお話を読んで考えるだけでなく、実際に行動に起こして体験することでより自分たちの問題として取り上げることができるのではないかと考え、その前後にアクティビティを取り入れることにした。

＜活動の流れ＞

①　アクティビティ「１こ？２こ？？」

おはじきを１人４つずつもち、片手に１つか２つのおはじきを握る。２人組になり、相手に「１か２かどっちだ？」と尋ねて、あたったらそのおはじきがもらえる。（はずれたらそのまま。）お互いにやって、あいさつをしてから、次の相手を探す。その繰り返し。

この活動をし始めてすぐに、「先生、おはじきがなくなりました。」という子が続出した。その子達に「どうする？」と尋ねると、「席に座ってみておく」というので、他の子どもたちの動きを観察させた。ふりかえりで、「早く終わってしまった人どうだった？」と聞くと、「さみしかった」「つまらなかった」「いいなあと思った」などの言葉が出てきた。

②「くりのみ」を読んで、登場人物（うさぎときつね）の気持ちについて考える。

＜あらすじ＞

ある寒い日、仲良しのうさぎときつねは食料を探しに森の中に出かける。すると、きつねはどんぐりをたくさん見つけ、それを腹いっぱいに食べた後、あまった分を隠す。

後でうさぎに出会い、何か見つかったかと尋ねられたきつねは「何にもなくてはらぺこです」と答え、それをきいたうさぎは自分の見つけた２つのくりのみのうち、１つきつねに分けてあげた。すると、きつねは涙をながした。

この話を読みすすめていく中で、子どもたちにはうさぎときつねはどういう感じがしたのか、なぜうさぎはきつねに分けてあげたのかについて、焦点をあてて、意見や思いを出させた。

③　①と同じ活動をする。

初めと同じ活動をするのだが、その前に「うさぎさんときつねさんの気持ちを考えながらやってみてね」と声をかけた。すると、活動の途中で、同じようにおはじきがなくなりましたと席に着く子が出てきたときに、何人かの子が「おはじきをわけてあげてもいいですか？」と尋ねてきた。そして、全員が最後まで活動に参加することができた。ほぼ全員の子どもたちがおはじきをあげるか、もらうかしていた。ふりかえりのときに、おはじきをもらった子、あげた子それぞれに「どんな感じがしましたか？」「どんな言葉が聞こえましたか？うれしかったですか？」そして、その最後に「どんな顔が見えましたか？」と尋ねた。すると「みんなうれしそうだった」「笑顔だった」「にっこりしていた」「それを見ていて私もうれしくなった」という言葉が出てきた。

④　まとめ

最後に③の活動で得られた感想と、「くりのみ」のうさぎさんの気持ちを照らし合わせて、どういう学級なら、みんなうさぎさんのようににっこりしていられるかについて、考えた。

●　②の資料をはさんで、①③で同じアクティビティを行うことで、子どもたちは自分たちの活動をすぐにふりかえることができ、そのときの気持ちについて、率直な意見を出し合うことができていたように思う。特に低学年の道徳においては、資料でつかませたい主題について、身近なものとして捉え、自分たちの問題、生活に置き換えることが、より深く考えさせるためには良い手法であると感じた。しかし、①の活動に重点を置き過ぎると、１時間（４５分）以内で主題を深めることができなくなるので、注意しなければならない。その代わり、③の活動では、しっかりと時間をとり、ふりかえる時間もゆっくりと与えることが、大切である。